

今の生活があること

東京頸髄損傷者連絡会 鴨治 慎吾

1992年9月11日東京の環状7号線の豊玉交差点を右折中、走行中のトラックに後ろから追突！心肺停止（レベル300）状態で日大救急救命センターに搬送。何とか脈が戻ったが、自発呼吸なし。意識も戻らず、C2骨折損傷。頸髄損傷となる。

数日後に意識戻るが事故の記憶なし、自分では何が起こったか分からず、レスピレーターや点滴の機械、モニター等が光る暗いICUの中、本気でUFOにさらわれたかと思っていた。（笑）

1997年6月昭和大学病院リハ科で呼吸器離脱訓練を受ける。約4年半の呼吸器生活から離脱。↓



さらなるリハビリを受けるため国立障害者リハビリテーションセンター病院へ約一年入院を経て、国立伊東重度障害者センターに入所。

2003年3月に退所、地元東京都練馬区石神井町で自立生活を始める。

国リハ入院中に頸髄損傷者連絡会を知り、勉強会に参加。故三澤さん、今西さん、菊地さん、麩澤さんなどの方々に会い、頸髄損傷でも色々なことができることを知る。これがきっかけで自立生活を知る。

ここで頸損の知り合いができたことが自分にとって人生の大きな分岐点であった。この出会いがなければ今の自分はないのではと思う。

その後、伊東重度入所中に自立生活のための準備を進める。2週に1回実家へ帰り、役所の相談・住宅探し・事業所との調整・住宅改修等を始める。

頸損連絡会の方々と知り合えたことで、住宅改

修や生活の様子、工夫、介助を入れた生活などを知りその後の自立生活に大いに役に立った。特に長時間介助を入れた生活についての話は色々なカルチャーショックを受けた。ここでは絶対に書けないことなどがあり、そのことは今でも教訓となっている。（笑）

その他に、住宅改修とはいっても実際福祉用具はほぼ、設置型が多かったことや皆同じものを使っていること（定番品）、様々な生活上の工夫などを知ることができた。これがあったことで自立生活初めのトラブルや選択ミスが最小限で済み、その後の生活がスムーズに行えた要因であると思う。

一つ例外だったのは、電動車いす作成についてである。情報もなにも知らず、言われるがままに作成してしまったため、後々生活するにつれて様々な不具合を知ることとなる。もちろん仕方がないことだが、後に多機能な車いすがあることを知った（使用している人を見た）。数年経ち、電動車いすの対応年数を越えたため、今まで生活してきた経験や数々の情報をふまえて新しい車いすを作成した。特にティルト機能はとても役に立った。今までリクライニングしかなくそのたびに体がずり落ちてしまったことが解消され、生活はかなり改善された。生活に合った車いすとなり以前と比べると格段に生活が向上し、よりアクティブに動けるようになった。機器一つでここまで生活が変わることを実感した。

頸髄損傷になったときは何もわからず、また何の情報もなくものすごく不安になり絶望した。しかし家族や支援していただいた方々のおかげで現在ではどうにか生活はできるようになってきた。特に同じ障害を持つ仲間たちにはだいが助けられた気がします。何もわからなかった自分に色々な情報をくれ、生きるための選択肢を多く与えてくれた。このおかげで今の自分があるといっ